牛乗山から……
山綱川の川面から……
緑の風がそよぎ頬をなぜる、
藤棚の下。

わたしたちは、
この緑の図書館で
読書をする。
紙芝居を見る。

ここだけは涼しい別天地。
いつの間にか
夏の暑さをわすれ
読書の世界に浸っていく。
この読書が、
いつか
人生の中で役立つことであろう。

昭和55年８月１日
編集・発行
岡崎市教育委員会

（みどり図書館で紙芝居を見る子どもたち－藤川小）

— 教育随想 —

歴史の周辺

中村繁男

元来、まとまった考えをもって本を読むというような律義さはないが、この所たまたま郷土の歴史にまつわる二冊の本を読んだ。一つは大久保彦左衛門の「三河物語」（現代訳）であり、もう一つは故新田次郎さんの小説「武田勝頼」である。私たちが所謂歴史ものにこれほどひかれるのは何故だろうか。司馬遼太郎さんの大作などを読むたびに、人間は何千年もの間、よくも同じような喜びや苦しみや悲しみを繰返してきたものだと感心させられる。そして現代をその時代におきかえてみて余りにも似たような出来ごとの多いのに驚かされる。

二日前、京大教授の政治学者高坂さんのお話しを聞く機会があったが、「革命のあと、必ず武断派と文治派との争いがある。」というような意味の言葉が心にのこった。明治維新における大久保と西郷、中国革命における実務派と文革派、イラン革命における新政府とホメイニ師というように、両派の対立は必ずといってもいいほど革命後の統一を遅らせる。文革派は中国の近代化を十年ほど遅らせた。西郷の征韓論が無理押しされていたら、近代国家日本は成立しなかったかも知れない。

彦左衛門も本多正信の関ヶ原での実戦指揮の経験の無さをなじったあと、次第に勢力を増してゆく政治官僚に対し没落してゆく一族の悲哀を訴えている。

——今度の大坂の合戦で、恐ろしくもない場で逃げたものが、十分すぎる知行を今までの知行の上にあたえられ、人を多くつれて堂々と歩く。わたしどもは何度かの戦に手柄を立て、三河以来家光公まで九代にわたる譜代の臣であるが、右の人々が人を多くつれて道を通るとわきへよけて通る。そのときには、何とも情無く大きな涙がはらはらとこぼれてくる。

——

大久保一族の悲哀はその後、いく度となく歴史の中で繰返されたのである。

「武田勝頼」は新田さんの詳しい考証による歴史小説である。この小説の中で私をもっともひきつけたのは家康の長子、信康自刃のくだりであった。「三河物語」は勿論、他の作家の小説の中にも、そして映画や舞台にも悲劇の若武者として登場する岡崎三郎信康の自刃について、新田さんはその原因が徳川の重臣で家康と並ぶほどの実力のあった酒井忠次と信康自身の確執によることを、資料にもとづいて推理している。若い世継と重臣との仲たがいを信長が利用しないわけはない。まして今川の筋につながる築山御前の腹を借りた御曹子である。二十一歳を一期として逝かねばならなかった信康の首塚は「若宮八幡」本殿脇にある。石垣をめぐらす小さな塚はまるで座敷牢の中にあるかのように陰気である。そして史実を秘めた「若宮」の名はひとしお哀れである。この春のはじめ、名残りの雪のちらちらする日若宮八幡を訪れた。首塚は早春の霙の中にひそやかに息づいていた。

口をついて一句、

首塚のただよふ小春の霙かな

（ユニオン産業社長）

一旦停止

柴田敏希

中国には交通ルールはないのか、あっても守らないのか。日本のような国から行くと驚くことばかりである。鉄道の踏切りでの一旦停止なんて決してしない。運転手の確認だけが頼りであるから危険この上ない話である。西安から渭水を越して始皇帝の造った都、咸陽の町へ向かう途中のこと。見通しの悪い踏切りを止まらずに横断しようとした時、私たちのマイクロバスの右から突然列車の顔が現れた。私たちが大声を上げると同時に、間一髪バスは急停車した。すんでのことで異国の地に葬られるところであった。通訳氏を通して、何故踏切りで一旦停止しないのかと運転手に詰問したが、若い彼はキョトンとしている。踏切り一旦停止の意味が分からないのだ。日本ではこうだと説明しても、「踏切りがある度に列車が止まるのか。」と本気で聞く始末で一同唖然としてしまった。その後、幾度も踏切りを渡った。その度に私たちは止まれ止まれと言ったが、勿論彼は一度も

—ふるさとの山河—

荒井山

大樹寺の東約一キロ、かっての阿知波道の片わらに、こんもりと茂る丘がある。

荒井山、通称赤山の名で人々に親しまれているこの付近は、市営住宅が立ち並び、都市化の渦に巻き込まれようとしている。そんなこの辺りも、今から三十年ほど前までは、人気のない、ただの雑木林が続いていたという。

しかし、江戸時代に、大樹寺の寺領を客来という形でうけ、三河でも五指に入る徳住行者が、この地に修業道場（九品院）を開いてから、西三河一帯の庶民の信仰を集めていた。徳住の師、徳本行者は、一所に教を定めずと、三河はもとより全国を旅して教えを広めていた。

大樹寺が徳川幕府の厚い保護の下で建立されたのとは違い、九品院は、全て、徳本行者の教えをうけた庶民の力によって建てられた。庶民の寄付を募り、庶民の手で山を切り開いてできあがったのである。

県道足助線の井田坂に、「阿知波道」の道しるべが残っている。人々は、この道を通り、善光寺参りをしたり、九品院で参拝してから、滝山寺、真福寺などの札所めぐりを楽しみにしていた。今でも、市内はもとより、形原、西浦、幡豆などの広い地域からの参拝者が後をたたないという。

九品院の奉納物の中、本やテレビなどで紹介され、有名なものが「亡霊持参の片袖」である。

嘉永五年十月十四日、吉良庄酒手島杢右衛門の伜、常三が亡くなった。その後両親の追善が真心のこもったものでなかったと、九年後の万延元年九月四日、亡霊がいとこの枕元に出た。真実の追善をして、極楽往生させてほしいと願ったとか。しかし、両親は、証拠がないので、追善しないと、その話に応じなかった。それを聞いた亡霊が、証拠の品として持って出たのが、この片袖である。驚いた両親は、さっそく岩津天神で願を果たしたところ、常三は、ようやく往生することができた。お礼として参拝した際に奉納したものとして、今に伝えられているという。

この話からも、この寺が、昔からいかに庶民の信仰によって支え続けられてきたかを伺い知ることができよう。

現在でも、十三人の行者が、徳本行者の教えを守り、日夜、捨世の業に励んでおられる。

都市化の押しよせる中で、今だに静かな域を残している九品院と、荒井山は、三河の庶民の信仰の象徴として、今でもわれわれ三河人の心の中に深く根付いている。

（大樹寺小　石井　洋）

停車などしてくれずに悠々と横断するので、私たちは踏切りがある毎に忙しく左右を確認しなければならなかった。

（東海中）

「あゝよかった」

岡山　由美子

ツアーから離れ一人になった。憧れのパリでひとり旅を満喫！なんてカッコつけてみたが、果たして無事でいられるか自分でも疑問だった。それでもオペラ座の近くに感じのよいホテルを見つけ、大きな荷物を持って地下鉄で移動した。

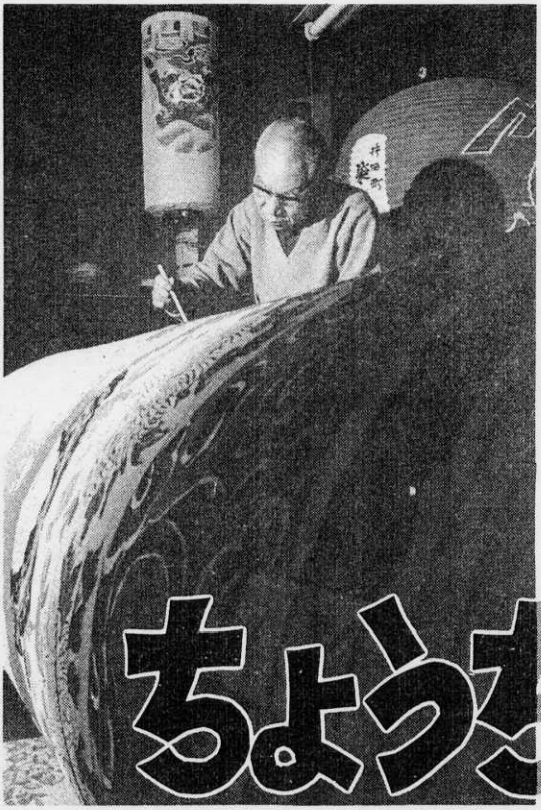
さあ行動開始！とばかりに地図を片手にモンマルトルの丘へ向かった。日差しもいいし気分も最高、足どりも軽くクリシィ通りを……

しかし、いくら歩いても寺院は見えてこない。へんだなあ、と往来で地図を広げていると、中年の仏人が近づいてきた。「サクレクール？」の問いにうなずいた彼は、私の腕をつかんですたすた歩き出した。わけのわからぬ仏語で話しかけ、喫茶店へ私を連れ込んだ。私は青ざめて「急ぐから結構です」というのだが、サッパリ通じない。（どうやら私を十七歳位の女の子と思っているらしい）震える足で一目散に逃げた。後から聞いた話だと、あの辺りは日本女性が突如として消える名所だとか。ゾー、もう少しで香港行きだったか。

（六名小）

岡崎再見 ㉓

ちょうちん



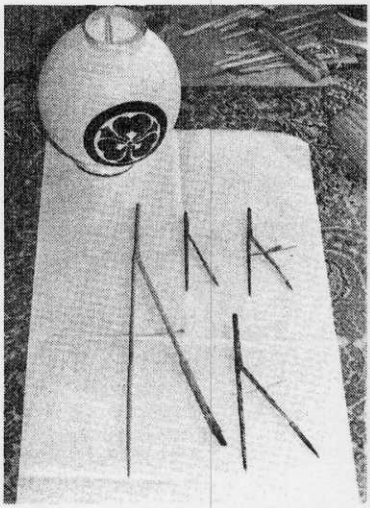
ちょうちんは、かつては家柄、権勢を世間に示す「看板」だったが、今ではもっぱら神社仏閣、商店街の大売り出しや祭礼など、季節の行事用に利用される程度で、時代と共にちょうちんの役目も変わってきた。

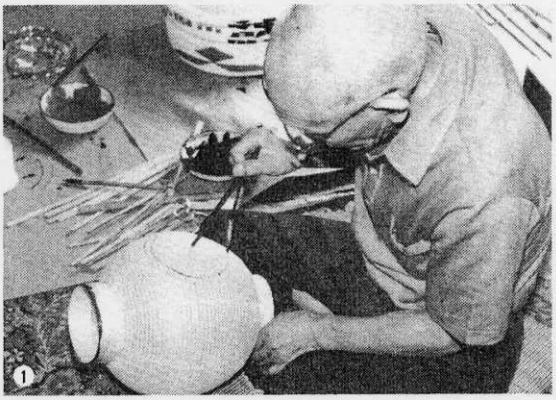
市内伊賀町の自宅に、「地張り作りの名人」といわれている畔柳民三さんを、私たち月報編集子は訪ねた。畔柳さんはちょうちん一筋に六十年、昨年の市制記念日に産業功労者として表彰された一人でもある。

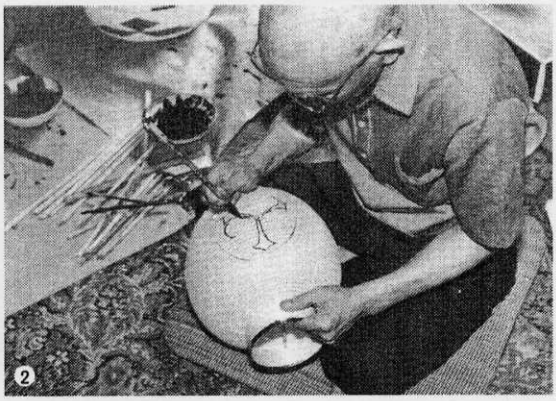
なにごともインスタントばやりの世の中、ちょうちんとて例外ではない。盆踊り、ビヤホールなどのちょうちんは、竹にかわって合成樹脂の骨、紙は和紙にかわってペラペラの洋紙、手書きから印刷へと大量生産用に大きくかわってきたという。

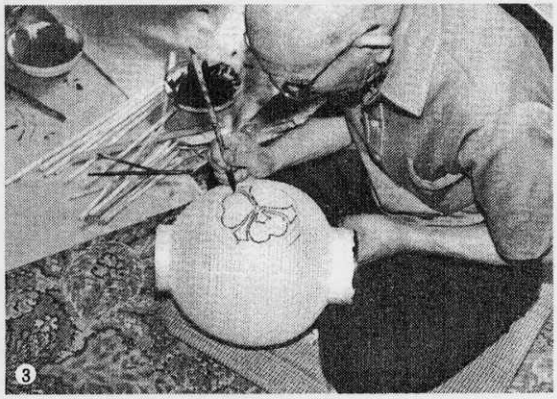
しかし、「世の中がどんなにかわっても、ちょうちんはやはり日本古来の伝統産業の一つであることにちがいはない。最後の仕上げになる、書き入れたちょうちん文字が生きているかどうかで、そのちょうちんの真価が問われるからたいへんだよ。」と語ってくれた畔柳さんの顔には、やはり職人かたぎの根性がみなぎっていた。

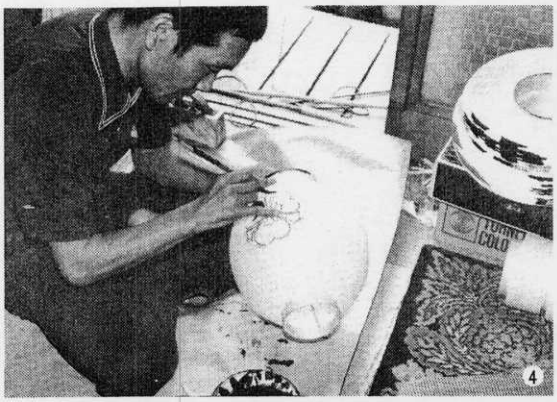
戦前は十二、三軒もあったちょうちん屋さんも、今では岡崎市内で畔柳さん宅がただ一軒だけ。年期がいる仕事だけに人手難であるとか。

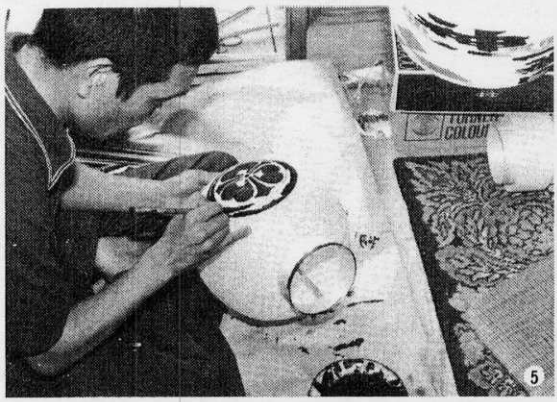


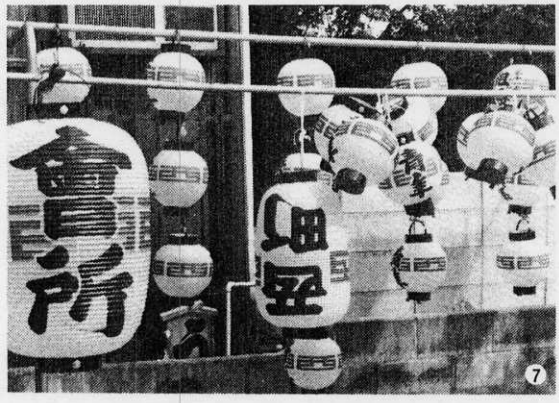












①竹を使った自作のコンパスで、家紋や模様などの円形部分をかいたり、模様の基準点を求め、印をつける。

②筆を用い、家紋や模様の下書きをフリーハンドで描いたり、原図をちょうちんの内側に入れて、写しとって下書きを完了する。

③下絵の塗りつぶす部分に墨やポスターカラーを使って、家紋や模様を描いていく。また、高級のものは色を顔料で作り、多色仕上げする。

④描かれたちょうちんに、金具を組み立てて取り付ける。

⑤金具の取り付けられたちょうちんに、刷毛でエノ油を塗り、天日により乾燥して出来あがる。

教育日々

詩の暗誦

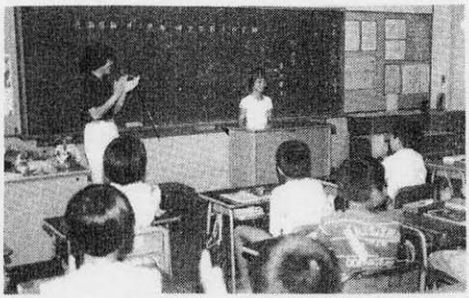
緑丘小　富田玲子

「先生、今度読む詩は、何という詩？」

一つの詩が終わって、次の詩にかえようかなと思うころになると、こんな声が聞かれるようになってきた。毎朝、詩人の書いた詩を読むようになって、今年も、もうすぐ一学期が終わろうとしている。

私の組では、毎朝、朝の会の一～二分を使って、詩人の書いた詩をみんなで声を出して読むことにしている。声に出して読むと、ことばのリズムの楽しさが味わえる。詩の長さなどによってもちがうが、一～三週間ほど同じ詩を読み続ける。くり返しているうちに、

「もう見ないで読めるよ。」



といって、暗誦する子も出てくる。子どもたちは、覚えることは嫌いではないようだ。むしろ、リズムのある詩、楽しい詩など喜んで覚える。長い詩などでは暗誦するのにも、各行の最初の語句や文字などを残しておいて、後は消すというようにしている。たった一文字でも残っているということは、子どもたちに抵抗を少なくしているようだ。

こうして、身につけたことばも、いつか子どもたちのものになっていくのではないかとも思う。

先日、外庭のそうじ当番になっていた子が、草を取りながら、

「しかし、どこから種がとんでくるんか

取っても　取っても

よくまあ　たえないものだ」

と、大関松三郎の「雑草」の一節を口ずさんでいた。その子の草を取る様子は、詩の中のことば、「ひっこぬく」がぴったりするようだった。

みがかれたことばに出会うことによって、子どもたちのことばの感覚が少しはみがかれるのではないだろうかとか、詩人の何か、新鮮なものの見方といったようなものが子どもたちにも伝わっていくのではないだろうかとか思っている。

今度は、どんな詩を出そうかとさがすことは、たいへんなことでもあるが、私自身も、いろいろな詩に出会うことをちょっぴり楽しんでいるのかもしれない。

野外学習―理科

竜谷小　山本信夫

「あっ、池がなくなって、田んぼになっちゃっとる。」

三年の「きせつと生きもののようす」の学習で、学校の周辺の水田、林に、「夏のしょうこ」を観察しに行った時のことである。

同じ場所へは四月の末、「春のしょうこ」をさがしに来ている。そして、子どもたちはそれらの変化の大きさにおどろかされたようだ。

> 夏のしょうこ　A女
>
> 春に見に行った時にはわたぼうや。五〇センチしかなかったガマの子ども。
>
> でも、今は二メートルもある！
>
> そんなに長いひにちだったかなあ？　そんなにひにちはたっていないはずなのになあ！
>
> たった二か月くらいの間に一メートル五〇センチものびてしまったのだ……

子どもたちは、春のようすを思い出しながら、いっしょうけんめいさがしている。

「メダカの赤ちゃんがいた。教室のよりも少し大きいよ。」

「小さなモノアラガイがたくさんいる。」

子どもたちの発見の喜びの声が次々と聞こえてくる。

教室内では、春に採集してきたオオカマキリの卵がふ化して、その数の多さにびっくりし、草原に逃がしてやった。

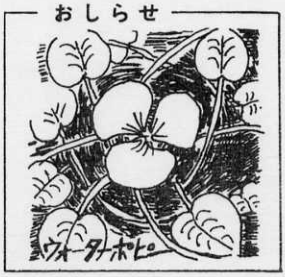
メダカも卵を産み、今ではビーカーの中を、小さな子メダカが泳いでいる。

オタマジャクシ、カブト虫の幼虫も、そのうちに子どもたちをおどろかせてくれるだろう。

しかし、野外では、教室の水そうの中では見られない感動を子どもたちに与えてくれる。

私は教室内で身につけた観察の力を、自然の中で生かしていきたい。教室内で学んだことが、野外で巾を広げ、深まり、そして教室内の学習にはねかえってくると思う。

秋・冬になればまた同じ場所に行く。今度は子どもたちにどんな感動を与えてくれるだろうか。



海外から二つのチビッ子来演

岡崎との友好をさらに深める

●日中友好

中国チビッ子文化大使
「小紅花芸術団」六十名
八月三日　午後一時三十分
岡崎市民会館で公演

小紅花芸術学校の生徒たちの中から厳選された七歳から十一歳の少年少女六十名から成る可愛い使節が、民族楽器の合奏や独奏、歌、舞踊をつぎつぎと披露してくれる。

江蘇省は愛知県と、また岡崎は蘇州と友好の手を結び、交流が深められており、今度の子供たちによる公演、交流は、これからの親善に大きな光を与えてくれよう。

小紅花芸術学校は、中国江蘇省にあり、全寮制で、中国の民族芸能を正しく伝承するため、その訓練も極めて厳しいという。

芸術団は、来日に備えて日本の歌や踊りも習ったとのことであり、立派な演を紹介してくれることだろう。

大きな役目を果たす小さな文化大使たちを心から歓迎し、岡崎のすばらしさを知ってもらいたいものである。

●岡崎市民音楽祭

スロヴァキア少年少女合唱団

共演「岡崎のハーモニー」
八月八日　午後二時～
岡崎市民会館で公演

民謡の宝庫といわれるスロヴァキアから、少年七名、少女二十八名の合唱団が初めて日本を訪れ、岡崎の子供たちと手をとり、にこやかに歌う姿に、場内からは惜しみない拍手が送られよう。

岡崎には一昨年、同じ国よりプラハ少年少女合唱団が来て、すばらしい歌声を聞かせてくれており、また昨年はハンガリー少年少女合唱団、ストックホルム少女合唱団と、世界の一流少年少女合唱団が続いて来演している。

「岡崎のハーモニー」も、こうした世男の友達と同じステージで共演することで、友好に大きく貢献している。

■第四回、日本標準教育賞

優秀三位に六名小　福応謙一先生

応募総数九五三編から、六名小福応謙一先生の論文は、みごと優秀三位の栄に輝いた。

○論題
「学ぶ楽しさを生み出す授業の創造」
――四年「下水のしまつ」の授業実跡を通して――

○概要

私たちが日常使っている水は下水となって流れていく。その下水処理の現状をとらえ、今後の下水処理についてはどのようなことが必要かを考えた。

その際、あくまでも子供たちの使っている水がどのようになっていくかを追うかたちで授業を進めた。

▽佳作　矢作東小　和田美奈子先生

※日本標準教育賞設定の趣旨
研究・工夫された教育実践を紹介、実践研究の輪を広め深めるねらいで設定された。

【寄贈刊行物・資料等】

◆岡崎の名木・岡崎の生物
岡崎生物調査研究会
八年にわたる調査研究の成果を写真入りで紹介。
A5版　名木一二二ページ
生物一〇四ページ
二冊ケース入り

◆岡崎ホタルガイドブック
岡崎ホタル研究会
見やすく、手ごろなガイドブック。B6版二六ページ

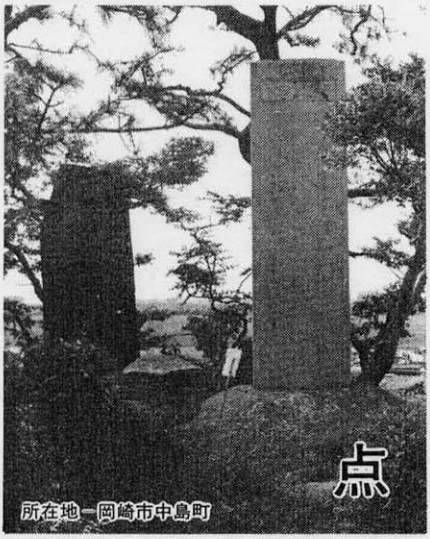
◆明日の岡崎を考える
―岡崎文化シリーズ5―
岡崎市民大学運営委員会編
五十三年度の市民大学から、上山春平、勝木保次、山田無文、都留重人各先生、岩津中学校での吉田光邦先生の講演を収録。
B6版一四〇ページ

◆東　風
岡崎市立岩津中学校
職員の読書感想文集。
B6版八二ページ

昭和55年度　夏季実技講習会

教科・領域	期　日	場　　所	人数
国　　語	7．29	連尺小学校	100
書　　写	7．29	岩津市民センター	60
社　　会	7．29	矢作川流域	70
算数・数学	7．29	岩津市民センター	40
理　　科	7．29	竜美丘小学校	60
音　　楽	7．29	六ッ美北部小	60
技術家庭	7．29	福岡中学校	40
家　　庭	7．29	羽根小学校	40
英　　語	7．30	矢作市民センター	35
特殊教育	7．29	福祉センター	45
図書館	7．30	図書館	50
VTR講習(視)	7.29,30	連尺小学校	60
吹奏楽	7.21,22	南中学校	500
保　　健	7．29	市役所6F	52
校内放送(視)	8．7	大樹寺小	160

「悠紀斉田跡」記念碑



所在地―岡崎市中島町

今月のよい日の御田植はじめ
稲の万才　御代の数

悠紀斉田跡記念碑は中島町、大正宮北五〇〇米の悠紀斉田跡地の北側にある。

大正三年、大正天皇即位にあたっての大嘗祭（天皇即位後、はじめての新米をもって皇祖及び天神地祇を祭り、自らも試食される祭儀）の新穀斉田に、中島町内の水田四反歩（約四〇アール）が決定された。

大正四年四月二三日播種、六月五日田植、九月二五、六日刈取り、十月一六日新穀一石三斗余（約二〇〇キログラム）の供納を終えた。なお大嘗祭は一一月一四日に挙行された。

記念碑はこの悠紀斉田点定を記念して、当時の抜穂式斉場正門跡に建立されたもので、高さ二メートル四〇センチ、巾七三センチ、厚さ四五センチの花崗岩の碑石が自然石の台石の上に立てられている。

碑の表面には「悠紀斉田跡」の題字と、斉田選定についての記録が、裏面には「供納玄米及び御用品の供納」についての愛知県知事からの命令書が刻みこまれている。

最近、「悠紀斉田」一帯を公園地化する工事が行われており、斉田も大巾に埋めたてられ、かっての面影は失われつつある。

●カット　矢作中　阿部泰子

オアシス

オリンピック、モスクワ大会と、オールスター、ゲームが夏休みの前夜祭となった。そして新人選手の活躍ぶりが新聞のスポーツ欄をさわやかに飾った。

夏休みは小中学生のスポーツの総決算期。汗と泥にまみれて栄冠を競い合う姿に、勝敗を超越して精進する人間の美しさを感得する時でもある。

小紅花芸術団が岡崎へやってくる。チビッ子親善使節団といったところか。

ところで、もうひとつ中国からめずらしいお客様が東京に来ている。五十万年前の「北京原人」だ。人類化石の実物が中国以外で公開されるのは始めてとか。八月末まで国立科学博物館で展示されている。機会があったら寄られてはいかが。

暑い。毎年のことながらやってくる夏。クーラーも扇風機もなかった時、野山をかけまわっては、たもやもちをふりまわしてどろんこになって帰った時、井戸で冷やしたあの西瓜のおいしかったこと、蚊にさされながら線香花火に興じたあのささやかな憩いは、昼のあの猛暑をふきとばしてくれていたのに。……

すばらしく晴れ渡った夏の夜。見上げた空は満天の星。「あれが天の川で、あっこにあるのが白鳥座だ。」小学校四年生の娘に教えてやろうと意気込んだが、あまり興味がなさそう。「あつ、銀河鉄道！」すっとんきょうな声で叫ぶ四才のちびに「どこどこ？」娘の声は弾むばかりだ。ちくしょう。

この本を

○いじめられっこ	冨田　武忠編	
講談社	¥	980
○けどの文化	春木　一夫	
日刊工業新聞社	¥	800
○自分学	多田道太郎	
朝日出版社	¥	980
○日本人の周辺	加藤　秀俊	
講談社現代新書	¥	390
○中学二年以後	望月　一宏	
中公新書	¥	380
○豊かな試練	高坂　正堯	
新潮社	¥	980
○もう一度海へ	永井　忠	
いきたかった　朝日新聞社	¥	880
○すばらしき子どもたち	吉岡たすく	
毎日新聞社	¥	850
○新　ちょっといい話	戸板　康二	
文芸春秋社	¥	900
○NHK　人生読本（3）	板坂　元	
日本放送出版協会	¥	1200